

### おしゃれもエンドレス

イラスト・文 本田葉子

2〜3カ月に一度くらのペースで会う友だち3人組。都度行きたいところや見たい展覧会、食べたいものなどを言い合って出かけている。みな手芸好き。編み物、洋裁、工作(こ



### わくわくするパンツ!

で行ってきた。まず作品の点数の迫力に圧倒された。じっくり一点ずつ見たい気持ちもあるけれど、年々鑑賞そのものに根負けしてしまふ感じだ。ああなんでもっと残念なことと嘆くより、ハツと目にとまった数点の作品が心の糧!とするくらいがちょうどいいのかもしれない。



見終わったあとは、お茶など飲みながら近況報告といつもながら着るもの話〜! 今回3人とも、太めのパンツをはいていた。裾広がりやバギーパンツ、腰から膝にかけてゆるい弧が付いたカーブパンツ、裾すぼまりのバルーンパンツと三人三様だ。どれも着痩せや脚長見せ効果はないけれど、あえてはいじまう。腰回りとヒップを優しく包み込んでくれるゆとりと安心感、そして暖かさが3人に共通するパンツだ

ちょっとの工夫は下半身にボリュームが付いたら上半身は小さくまとめるの術だ。あくまで自己の内での大小で。足元は3人ともスニーカーでそろっていった。たくさん歩きそうな予感もあったしね。転ばぬ先のスニーカーか。好みの帽子やバッグで個性は出る。まだまだおしゃれに根負けはしたくないな〜と思う。行きたいところ、会いたい友人がいるうちはなおさらだ。

(隔月掲載)

### ずいそう



手芸技法を用いて作品制作をしているので布を購入することが多く、部屋は布や古着であふれています。手芸屋さんや生地屋さんに行くこともありますが、最近はおークション・フリマサイトに個人の方々が出品しているものを購入することの方が多いです。そういう中には、「母が数十年かけて集めたものですが、もう縫物ができなくなりましたので出品します」というような説明が添えられているものが少なくなく、同じ布集めをしている者として、切ないような、何とも言えない気持ちになります。

今年の夏の展覧会のため、資料として90年代の日本のインテリア雑誌を読んだのですが、そこで

### 家庭の中の創造性

碓井ゆい(現代美術作家)

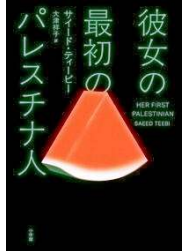
驚いたのは、カーテンやクッションカバーなど、家の中のあらゆる布製品を手作りしている人がこんなに多かったのか! ということでした。ファストファッションなどデザイン性の高い商品が安く手に入る現在では考えられないような創造への熱量がそこにはありました。当時「主婦」としてそういった手芸制作を担っていた人たちが高齢になり、材料を手放して

るといふことなのかもしれません。そしてこのよる家庭の中の創造性が、改めて振り返られ評価されるべきなのではないか、とも感じました。私も負けないように作品制作をがんばろう! と思うと同時に、そうしないと、これだけ増えた布を将来子どもが持て余してしまうかも...と少々不安も感じました。

連載最終回です。ありがとうございました。

※唯井ゆいホームページ <https://yuiusui.com/>

### B O O K



小学館 2600円+税

### 彼女の最初のパレスチナ人

サイド・ティーパー 著/大津祥子 訳

両親がパレスチナ人で自身はクウェート生まれ、現在はカナダ在住という著者が、パレスチナ移民たちの心情を描くフィクションの短編集。祖父と孫の会話を軸に、パレスチナや難民、移民の問題をより深く考えるきっかけになった。たびたび登場する中東の料理や風習にも心が引かれた。



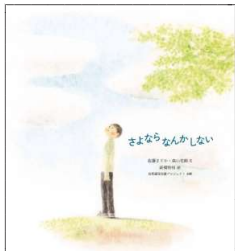
文芸春秋 1800円+税

### じゃないほうの歌いかた

佐々木愛

個人経営のカラオケ店を舞台にした話の連作短編集。登場人物はうだつのあがらぬ凡人たち。上京したが「ださい」自分から逃れられない女性、反抗期のスの数々。「じゃないほう」の一員でも、心のガードを緩めれば、身近な人の存在に救われたりする。それは小さな奇跡。胸がホッとあたたかくなる一冊。

### 代田知子さんおすすめの子どもの本 大人もぜひ!



シリーズ ともに生きる  
さよならなんかない  
佐藤まどか、森山花鈴 文  
高橋和枝 絵  
自死遺児支援プロジェクト 企画  
(小学校中学年〜)



文研出版 1500円+税  
みんなの居場所  
白矢三恵 作  
いつか 絵  
(小学校高学年〜)



借成社 1800円+税  
ラン・ガール・ラン!  
女子マラソンのとびらをあけたボビー・ギブ  
アネット・ベイ・ビメンテル 作  
ミーシャ・アーチャー 絵  
やすだふゆこ 訳  
(小学校中学年〜)

### 編集部から

本日(19日)、国会前で「女性は議員定数削減を許しません」と緊急行動。同日、宮城の宣伝では「私

る家庭の悩みと「ひだまり子ども食堂」に居場所を見つけるまでが、子どもの視点で描かれる。

最後の『ラン・ガール・ラン!』は、女子マラソンのとびらをあけた女性、ボビー・ギブ(1947年〜)の実話を、コラージュなどを駆使したイラストで伝える鮮やかな絵本だ。当時、女性にスポーツは向かないとされ、ボビーは学校の陸上部にも入れず、ひとりで走り続けた。1966年のボストンマラソン。出場を許されなかった彼女は、スタート地点に隠れて待機し、号砲とともに選手たちと一緒に走り出す。そして男性ランナーや観衆に応援されながら、ついに42.195kmを完走した。あきらめなかったボビーは、女性ランナーの道を切り開いたのだ。